

「地域で暮らすという事」 その4

あづましいと思える暮らし

たすけあいワーカーズ「むく」代表
石川 絹子

本格的な冬を迎え、かなり冷え込んだある朝の事、私は仕事に出るため、あたふたと家を飛び出したところで、高齢の男性に呼び止められた。ご夫婦で知人を訪ねて来られたようで、目当ての家が見つからないと言う。「何番号に住んでいらっしやるんですか？」と訊ねると、ご自分はポケットに手をいれたまま、おつれあいの方を振り返り「おい、住所書いたのどうした？」。その女性は白い息を吐きながら手袋をとり「たぶん、もう一本奥になると思うの」と言いながら、バッグの中からメモを取り出した。番地的にはわが家の裏になるようで、その旨を話すと、お二人で歩いて行かれたが、道はかなり

のテカテカツルツル状態、夫は妻を庇う様子ではなかった。また、数カ月前の事になるが、友人と近隣の町で催された陶器市に出かけ、役所の前から市のある会場までの無料送迎バスを利用した時の事。混み合ったバスの中に、御夫婦で乗って来られた方達がい、空席は一つしかなく、先に見つけた妻の元へ夫が来て当然のように座るという事があった。

在宅介護の事例では、妻が入院するような事態になった場合、ほとんどの夫は食事の支度どころか、自分の靴下がどこの引出しにあるのかさえ分からない、というケースが多い。「女性の自立」とひと頃騒がれていたが、「男性の自



石川 絹子 (いしかわ きぬこ) さん

南富良野町生まれ。

釧路赤十字看護専門学校卒業後、臨床・診療看護婦となる。

1994年たすけあいワーカーズ「むく」を設立し代表となる。

1999年10月たすけあいワーカーズ9団体による「NPO法人北海道たすけあいワーカーズ」の代表理事に就任、現在に至る。

4月からスタートした介護保険制度では、「指定居宅サービス事業者」の指定を受け、事業展開をしている。

立」のほうで、これからは問題になると思われる。今まで子育てに追われ、やっと子供を自立させ、やれやれと思っている女性の皆さんに「もうひと踏ん張りしてご自分のつれあいを独り立ちできるように育てていただきたい」とお願いしても「え〜！うちの亭主はやるだけ無駄よ」なんて言われそう。しかし、介護が社会化されるであろうこれからは、男性の参画も求められるわけで、家事一般から力仕事や運転手までできる男性がいたら、それは引く手あまたで優秀なヘルパーになれる。

自分の伴侶だから、何かしてあげても「当たり前」、なんて思っ
てはいけない。よそ様なら「ありが
とう、助かりました」と感謝す
るわけで、そこには夫も妻もない。
妻にやさしくするのはテリッくさ
いとシャイな男性も多いでしょ
うが、妻を庇って歩いたり、席を
とって座らせたり、そんな男性が
カツ」いい時代になるであろう。
「お茶、新聞」と妻を名前では
ない、物で呼びつける男性は
博物館行きで、自分でお茶を
いれて妻に運んでくれるよう
な男性が普通になると思う。

「介護は社会で、家族は愛
で」そんな社会が普通の事にな
ったら、この町で私が介護
の仕事をしているように、地
方に居る親の介護もその地域
の社会がしてくれる。そう考
えると、気が引ける事もなく
随分安心できるし、遠距離介
護も老老介護も少なくなる。
今はあまりにも頑張りすぎる

娘や嫁が、逆に「福祉」の成長を遅らせているように思える。親や夫の介護にひたむきに取り組むのは、美しい事と社会がもてはやしてはいけない。老いをどう生きるかは、それまで自分がどう生きてきたかが試される事だと思う。

これからは、家庭や地域に根をはって、できる範囲で関わりをもち、良い人間関係を作っておく必要がある。私はこんなふうに暮らしたい。こんな夢がある。こんな事に挑戦してみたい。こんな仲間を募りたい。等々を家族や夫婦で、時々話し合ってみるのも大切だ。

以前、私が病院に勤めていた頃、Nさんという七〇歳代の女性と知り合った。喘息の

持病があり、一人暮らしのため、冬になると入院していたようだ。発作がない時は健康な人と変わりないので、身支度も身の回りもきちんとしていて、他の患者さんの世話もさりげなくしていた。そんなある日、彼女の髪を洗ってあげていた時の事、「他に何かご希望はありませんか？」と尋ねたところ、「家に帰りたいね。私は死ぬときは家で死にたいの」と。それから間もなく、強い発作が彼女を襲い、意識がなくなり、呼吸器の力でかろうじて生きていたが、彼女の希望は遂に叶わなかった。

最近では、病院や施設で亡くなる方がほとんどで、多くの人が「家に帰りたい」と願ってはいても、なかなかそうはならない

ように思うが、原因は何だろう。昔のようにどんな時でも往診してくれる家庭医が見つかからない事、苦痛や緊急時の対応に不安がある事、それは医師をはじめとする医療関係者に任せると安心、という医療信仰があるためか、病院や施設に居るのが、一番良いと思ってしまうからであろう。「家に帰りたい」と願う人がいたら、それに叶える道がこれからは必要だ。高齢者ばかりではなく、「ターミナルケア」を考えた場合、若くても病気のために生を阻まれてしまう事もある。それでも自分の家で、家族に囲まれて、精一杯人生を全うしたいと願う人がいたら、その希望に叶えたい。そう思う人は沢山いるでしょうし、実行している人もいるだろう。思う

でも実行しなければ動きださないと判った人がもつともつと増えると思わなくてはならない。

さて、今回で私の拙いエッセイも終わりなので、その後の会の状況を少し、お知らせしたい。特定非営利活動法人（NPO）を取得して一年が過ぎ、介護保険の訪問介護に参画して間もなく一年になる。今まで自主事業での利用者さんが、引き続き保険でも利用していただけるようにと指定事業者になったが、計画を上回る件数を抱えるようになった。新しく利用される方が増え、嬉しい悲鳴をあげている。これも、設立当初より利用者さんの立場に立ち、柔軟な対応に努めてきた結果だと思う。

除雪はヘルパーの仕事では



ないと、厚生省は通達を出したが、北国の地域性を全く考えていない。一年中自転車移動できる地域とは違うのだから、訪問のために一時間もかかる地域性も分かっている。吹雪の朝は交通が麻痺しているので、時間の予定がたてられないので、一時間以上も前から家を出る事もある。保険者が地方自治体だというなら、独自性や地域性を主体的に取り入れるべきだと、冬になりつくづく思った。それでも、待っていてくれる人がいるかぎり、どんなに吹雪いても、私たちはケアに出かけていく。

さまざまな優遇を受けている公益法人ができないところを小さなNPOがやっていく。経済性を優先するため企業が

撤退したようなところを私たちNPOが埋めていく。こんな働き方を多くの人達が認めてくれて、育てていってくれる事を心から願っている。私たちは困ったに思えるサポーターだが、そんな活動を支えてくれるサポーターが、たくさんたくさんになっていくといいなと思う。高齢になっても障害をもっても、わが街のわが家で自分らしく、あづましい暮らしができれば良いなを皆で考え実行していけたら、楽しみがまたどんどん増える。そのためには何が必要かな？ グループホーム、ケアハウス、ミニデイサービス、リフト付きの車で温泉めぐり、ホームステイでの海外旅行、その他
・・・、それから・・・。